

手術患者の体への負担軽減・組織への損傷軽減

- 内視鏡の精度向上、医療技術の向上により病巣の早期発見が可能になり、病巣の小さいうちに処置できる鏡視下手術のニーズが高まっている。
- 鏡視下手術において、低侵襲化(体への負担軽減)が進み、20mmの開腹創より色々な鉗子を挿入し手術する方法が開発され、更に腹壁に一切の開腹創を設けない手術法が開発された。
- しかし、それぞれ大きな欠点を有し、色々な鉗子を挿入し手術する方法は、鉗子がお互いにぶつかり、視野が悪くなる。腹壁に一切の開腹創を設けない手術法は、内視鏡の支持力が不十分なため組織に損傷をきたす危険性がある。
- このことから更なる低侵襲化が、手術執刀者から要望されている。

ニードル型デバイスの開発

ニードル型デバイスと言う全く新しい構造を持つ新規性・独自性のデバイスの実現。それによる新たな超低侵襲治療法が実現する。

ハリキ精工:難切削加工技術を用いた事業展開

九州大学との共同開発を行い、生体適合性メタルを難切削加工技術を用いて部品加工、組立てすることにより、ニードル型デバイスを開発する。更に、この開発品により市場参入を実現する。(大阪市、資本金 6千万円、従業員数 106人)

従来技術



ニードル型デバイス



超低侵襲治療法

